



# ポロポロ Sドル

担当Pは豊直でDM

# プロデュース 莉々奈の

小説★ウナル  
挿絵★ぼみみ子

試し読み版

第一章

アイドル同棲生活

006

第二章

勃起チンポにお仕置きフェラ！

061

第三章

ドMの目覚めは足の感触

103

第四章

妹アイドルSプレイ

148

第五章

ラブ本番はお風呂の中で

192

第六章

ライブ後の本気種付けセックス！

237

# 登場人物紹介

ひめみやりりな  
**姫宮莉々奈**

アイドルグループ『アルテミス』のリーダー。明るく活発で強気なギャル系美少女。



ひめみやあいら  
**姫宮愛莉**

莉々奈の妹で、『アルテミス』のメンバー。明るく無邪気な小悪魔系美少女。

だて たけあき  
**伊達武明**

『アルテミス』のプロデューサー。優しく真面目な青年。

## 第一章 アイドル同棲生活

「やはり素晴らしいステージだ。ここでアルテミスのライブを」

客席からライブステージを眺め、伊達武明だてたけあきは感嘆の息を吐いた。

スーツの右胸には『トライスター事務所 プロデューサー』の名札が揺れている。

「いい会場だよなあ、伊達くん。首都圏から少し離れちゃいるが、ここならアイドルたちの華やかさにも負けないぞ」

ジーンズのポケットに手をつ突っ込み、ペタペタとサンダルを鳴らしながら髭面の男がやって来る。下見に同行して貰っている演出家の藤原ふじわらだ。

「照明も音響も融通が利くし舞台装置も揃っている。二ヶ月後のライブは真夏だからな。冷房を使っても余裕のあるステージを探すのに苦労したぜ」

「ありがとうございます、藤原さん。こんな大舞台なら彼女たちも喜びますよ」

「上もそれだけ期待してるのさ。なにせ『アルテミス』は次のウチの看板アイドルグループだからな」

その言葉に武明は身を硬くした。

アルテミス。

ギリシヤ神話の女神の名前を付けられたこのグループは、トライスター事務所の若手五

人を集めて作られる。

若手と言っても実績を重ね、既に雑誌やラジオやCMなどで活躍しているホープたちだ。固定ファンもできていて、ライブを開けば十分な集客を見込めるだろう。

それらをまとめ、グループとして確固たる地位に押し上げようというのが、今回の社の狙いであった。

現在は四月の末。ここでグループとして大々的に売り出すことで、新年度を迎えている学生や社会人の話題として浸透させ、七月のライブへと繋げる。そしてそのプロデューサーに選ばれたのが、アイドルたちと同じくまだまだ若手と言える武明であった。

「そういや、伊達くんは入社して何年目だ？」

「三年目です。今は二十四ですね」

「そうか。その歳でこれだけの仕事を任されるなんて期待されているじゃないか」

「部長が仕事を回してくれただけです。それに頑張っているのはアイドルで俺は環境を整えているだけですから」

実際、武明はプロデューサーという仕事をそう捉えていた。

アイドルたちに目標を与え、最も活躍できる状況を考え、そのための道筋を整える。

その整える作業も藤原のような専門家や地道な仕事をこなすスタッフ、資金を出してくれるスポンサーがいなければ実現できない。

偉そうな肩書を背負ってはいるが、自分一人では何もできないのだ。

だからこそ参加してくれる全ての人が満足できるよう、己の全責任を持ってアイドルたちの舞台を整えたいと思っている。

「謙遜するなよ。本当はもつと小さいステージにする予定だったのに、伊達くんが資金繰りに駆け回ったらしいじゃないか。部長を熱心に説得してスポンサーにも呼び掛けて」

「それは……やるからには最高の舞台を用意してあげたいと思っただけです」

「その気持ちを行動にできるってのは偉いもんだよ。それにアイドルは繊細だ。信頼できるパートナーがいないと実力を発揮できない子も多いって聞けぞ？」

にかつと口元を緩めた藤原はステージへと歩いていく。

少し軽くなった肩で武明もそれを追った。

「さて、プロデューサーの注文に応えるのが演出家の仕事だ。実際にステージを見て注文はあるか？ できる限り応えるぜ？」

「そうですね。これだけの広さと照明がありますから、今まで以上に大胆で動きあるものにしたいですね。登場も派手にしていきたいです」

「ステージ下からジャンプで登場とかか？ 彼女らに経験はあったかな？」

「あー、すみません。あとで確認します。何人かはあったと思うんですが」

「OK。まあ何よりレッスんだ。動きが激しい分体力作りも必要だしな。ライブ前に集中合宿もするんだろう？」

「はい。山の合宿所を使えることになりました」

「よし。グループとして初めてのライブだ。印象に残るものにしよう。背景スクリーンも活用しないと勿体ないな。こう、アイドルたちの顔を映像で映し出す感じでき」

「いいですね。ファン受けもするでしょうし」

真剣な表情でステージを睨む藤原。その傍について回りながら、武明は必要事項をメモしていく。

そこでふと藤原が顔を上げた。

「そういえばリーダーは誰か決まっているのか？」

「はい。姫宮ひめみやさんさんにお願いしようかと考えてます。あ、姉の方の。彼女は知識も経験もメンバーの中で一番でしょうから」

「ああ、あの子か。なるほど。妹ちゃんも懐いてたな」

「他のメンバーともう顔合わせはして一緒にダンスレッスンをしているそうですよ。自分もこれから本格的にプロデューサーとして関わることになるので、積極的に動いてくれるのはありがたいですね」

そこで武明のポケットから電子音が鳴った。

携帯電話を取り出すと、部長の名前がディスプレイに表示されている。

「あ、すみません。部長からです」

おう、と手を上げる藤原から少し離れて電話に出た。

「はい。伊達です」

『伊達くん。今いいか？ 周りに誰かいるか？』

「え？ いや今は藤原さんとステージのチェックをしまして。他には誰も」  
妙なことを聞くなあ、と思いつながら武明は辺りを見渡す。

ライブが始まれば熱狂に沸く客席も今は静かに佇たまたまんでいる。聞こえてくるのは自身の声の反響音と、ステージを歩く藤原の足音だけだ。

『ならいい。単刀直入に言おう。アイドルが入っているマンションで火事があった』

「——え？」

脳裏が一瞬で真っ白になる。

「か、火事ってどこがですか!? 誰が入居して、け、怪我は!?」

『落ち着け。私も確認したが誰も怪我していないよ。そもそも火が出たのは隣の部屋だったからね。ただ延焼してしまつて部屋は出ないといけなくなつたが』

ほっと息をつく。まずは怪我がなくて何よりだ。しかしアイドルたちはきつと不安がつているだろう。すぐに武明は決断した。

「私も現場に向かいます。被害にあつた子に会つて話を」

『今からじゃ無理だろう。帰つて来る頃には深夜だぞ』

そう言われて腕時計を見た。時刻は夜の九時半。運よくタクシーを拾えたとしても事務所に戻る頃には十一時近くになつてしまう。

『もうホテルはそつちで取つているし、こつちは私に任せて君は仕事に集中してくれ』



「……わかりました」

本当は今すぐにでも飛び出したかったがスーパーマンのように空を飛べるわけもない。大きく息を吐き、武明は確認すべきことを口にする。

「それで、一体誰が？」

「ああ、姫宮莉々奈——知っているだろう？ 彼女とその妹の愛莉くんが一緒に住んでいたマンションだ」

もちろん知っている。今しがた話題に上げていたのだから。奇妙な縁を感じて苦々しい笑いが浮かんでしまう。

「今は事務所近くのホテルに泊まって貰っているよ。私物も事務所で預かっている。それでなんだが」

そこで部長は小さな咳払いをした。

「事務所の寮に確認したんだが、空き部屋は一つしかないそうだ。なのでそっちには愛莉くんが入ることになった。まだ小さいからね。その方がいいだろう」

「そうですね。寮なら見知った人もいるでしょうし、安心すると思います。それに火事で怖い思いをしたんです。彼女たちの心のケアもしてあげないと」

「お、そうだな。そうだろう。誰かが傍にいて安心させてやらないとな」

「？ ええ、そう思いますけど」

どこか含みのある部長の言葉に眉を寄せる。

『ウチが契約している他のマンションや寮は軒並み満員でな。莉々奈くんの方は信頼できる人間の家に預けようという話になった』

「なるほど。一体誰に？」

『君だよ』

「——え？」

『だから君だ。伊達武明くん』

何かの冗談だと部長を待ったが、聞こえてくるのは笑いを堪えるような鼻息だけだった。「あ、あのどういうことでしょうか？ つまり俺が姫宮さんを預かることに？」

『君も知っているだろうが、アイドルの住居というのはデリケートな問題でね。変な場所に住まわせてしまうとストーリーカーや熱狂的ファンなどで問題になりかねない』

「そ、それはわかりますが」

『それとさつき君も言ったことだが、誰か信頼できる人間が傍にいて安心させてやらないとな』

武明の背中にだらだらと汗が流れる。

理屈はわかる。わかるのだが。

『たしか部屋が一つ余っていると行っていただろう。ちょうどいいじゃないか。君のマンションなら事務所も近いし、彼女が通う学校も遠くない。そういうわけでよろしく』

「ちよ、ちよっと待ってください！ たしかに空き部屋はありますけど！」

実際、武明のマンションは一人で住むにはいささか広かった。事務所への通勤や見栄えも考えて借りたはいいものの、大した趣味も持たない身では部屋を持て余し気味なのだ。来客用という名目で放置している部屋もあり、ちよつと掃除すれば住人が一人増えても問題はないだろう。

しかしスペース以外の面で問題だらけだった。

「男の一人暮らしですよ！　そこに女の子を泊めるなんて！」

『なんだ？　莉々奈くんに変なことをするつもりか？』

「っ、冗談きついです」

反射的に否定すると、部長の大笑いがスピーカーから聞こえてくる。

『そうだろうな。君は真面目だし、何よりそんな度胸が君にあるとは思えん』

褒められているのか貶けなされているのか。

どちらにせよ、もはや部長の中では同居が決定事項のようだ。

「か、彼女は了承したのですか？」

『もちろん。異論はないそうだ。まあ君は彼女のプロデューサーになる予定だったわけだし、いい機会だろう。これを機に親睦を深めておきたまえ。明日の夕方、君のマンションに行くとのことだ。では後は頼むよ武明くん』

それだけ言って部長は通話を切ってしまった。暗くなっていく画面に武明は嘆息する。「大変なことになったな」

なぜか楽しそうに藤原が言う。そんな彼に武明は真顔になる。

「藤原さん、マンションを交換しませんか？」

「いいけど、俺なら彼女を口説いちゃうかもしれないぜ？ あんな美少女と一緒にいられるんだからな。それでもいいかい？」

「い、いいわけではないでしょうが！」

顔を真っ赤にして怒る武明。そんな背中を藤原はバンバン叩く。

「ま、部長の言う通りだ。これを機会に信頼関係って奴を築くといい」

「うう。簡単に言ってくれますね。わかりましたよもう」

痛む背中をさすりながら武明は薄くため息をついた。



翌日、下見の報告を済ませるなり部長から自宅へ帰るよう言われた。

実質的な業務命令である。少しは見栄えをよくしておけという部長の気遣いなのだろうが、正直仕事をしている方がいくらか気が楽であったと思う。

「……こんな時間に帰るとか、なんか変な感じだ」

まだ太陽は頂点にも届いていない。

住宅地には車の通日も少なく、どこからか小さな子供の遊び声も聞こえてきた。

「春、なんだな」

柔らかな日差しの中を歩き、自宅である十八階建てマンションへと辿り着く。

「ただいま、つと」

革靴を脱ぎながら、武明はしげしげと陽射しに露わになった玄関を眺める。

「うーん。汚い……よな」

靴などは清潔を保っているつもりだが、玄関の隅や傘立てなどにはホコリが目立つ。

リビングには脱ぎ散らかしたスーツが転がり、机にはメモ帳や本が出しっぱなしだ。

キッチンも酷い。ゴミ箱には弁当のガラやペットボトルが山となり、こんもりとはみ出している。出そう出そうと思いつつ、ついついゴミ出しを忘れてしまった結果だ。

冷蔵庫を開けると、男の一人暮らしを象徴するような寂しい光景が目に入る。

横倒しで突っ込まれたミネラルウォーターに、申し訳程度のバッテリーやキャベツや卵。

風呂場はどこかかび臭く、トイレはよれよれのタオルをかけっぱなしだ。

そのくせ新しい住居人が来る予定の空き部屋は存在を忘れ去られたように物が無い。自分の無関心っぷりに少しだけ愕然がくぜんとしてしまった。

「あ、毛が」

廊下の端に落ちていた縮れ毛を摘まみ上げる。こんなものを女の子に見られたらどう思われたことか。

ふう、とため息をつき武明は肩を回す。

何とか『汚い』という印象にならないのはそれほど物を買わないのと事務所にいることが多いからだ。自宅にいる時間がもっと多ければこんなものでは済まなかっただろう。

「……この家にアイドルが」

口に出してみるが全く現実味がなかった。武明とてプロデューサーの端くれ、アイドルたちと向き合うのはもはや生活の一部になっていた。だが実際の生活空間にアイドルが来るというのは夢にも思っていなかったことだ。

武明は仕事部屋に向かうと本棚から一冊の本を手にとった。事務所が発刊しているアイドル専門雑誌である。その表紙には笑顔でウインクを決める少女が写っている。キャッチコピーは『超ド級のギャルアイドル襲来！』だ。

「姫宮莉々奈、か」

直接の担当になるのは今回が初めてだが、彼女のこととはよく知っている。

なにせアルテミス結成に当たり、メンバーの資料を頭に叩き込まされたのだから。

部長から「これくらいは目を通しておけ」と山のようなダンボールに入れられた雑誌やDVDや写真集を渡された時は軽くめまいを覚えたものだ。

「いわゆるギャル系アイドルだよな。男性人気はもちろんだけど、若い女子のファンも多いタイプ」

トレードマークは赤みを帯びた髪とそれを結ぶリボン。それが彼女の素直で明るいイメージをさらに強めてくれる。それでいて煌びやかなイヤリングなどの装飾品を付けていてどこか怪しい色気も持っている。

年齢は十代後半で顔つきも童顔の部類なのだが、キリッとした眉は大人の魅力となって

男の視線を離さない。大きなルビー色の瞳は見てみると吸い込まれてしまいそうだ。

もちろん身体付きも豊満だ。表紙のスナップでもむっちりとした谷間が覗いている。

それでいて腰回りはびっくりするくらい細い。もし抱き寄せたら折れてしまいそうなくらいだ。そのスタイルはグラビアアイドルとしても一線級だろう。

（そうだ。握手したこともあった。手がすつごくすべすべだったのを覚えてる）

不意に右手に柔らかな感触が蘇った。

あれは二年前、その頃はまだ大学を卒業したばかりの新米で、右も左もわからない状態だった。莉々奈も学生アイドルとして初めてのステージに立った時のはずだ。

先輩に怒鳴られながらとにかく駆け回った。色々とトラブルがあり、対応に追われていた。そんな時、莉々奈と出会った。「頑張つてね、プロデューサー！」なんて言つて手を握ってくれたのだ。

自分より頭一つ小さい少女にあれほど元気づけられるなんて思わなかった。

（あんなことされたら男なら誰でも惹かれるよ。それにあの時一番緊張していたのは彼女なんだ。それなのに笑顔を見せて応援してくれて。本当に彼女はアイドルなんだな）

それから莉々奈は地道にレッスンとライブを重ねて、今では期待のホープとして事務所から推されている。この前のライブでもショッピンングモールの広場を満員にしたという。

きつと彼女はこの先も、トップアイドルへの道を駆け上っていくだろう。

（思えば俺がプロデューサーを続けられたのは、彼女のおかげかも。辛い時も彼女の言葉

があつたから頑張れたんだ)

武明は懐かしさに口元を緩める。

(そんな莉々奈ちゃんか俺の家に……担当プロデューサーとして関わることはわかっていただけ、まさかこんな形で一緒に過ごすことになるなんてなあ)

どくん、と心臓が跳ね上がった。鼓動がどンドン早鳴り、身体中に熱い血液が巡るのがわかる。

(上手くやっていけるかな……いや、絶対に彼女のコンディションを落とすようなことはないようにしないと!)

顔を叩き武明は立ち上がる。押し入れから掃除機を引っ張り出し、お掃除ローラーと雑巾を装備する。莉々奈が来るまでに家を徹底的に綺麗にすると心に決めた。

それが済んだら次は買い出した。

あつという間に日は傾いて夕方となった。

できることは全てやり、武明のマンションは入居以来の美しさを取り戻していた。冷蔵庫には一通りの食材を放り込んであるし、タオル類も全て洗濯した。

「……そろそろかな」

事務所からの連絡では既に莉々奈はこちらに向かっていているらしい。そんな武明の心を読んだようにインターフォンが鳴り「すみませーん」と、鈴を転がす



ような声が聞こえてきた。

ごくり、と息を呑み武明は玄関へと向かう。扉を開ける前にもう一度、考えておいた挨拶を心の中で反芻する。

「い、いらっしやい。姫宮さん」

玄関を押し開けた瞬間、光が武明を包んだ。

制服姿の彼女は輝いて見えるくらいに魅力的だった。

「こんにちは♪ 伊達武明プロデューサー。姫宮莉々奈です♪ 今日からよろしくお願いします♪」

両手に荷物を抱えた彼女がにこやかに微笑む。武明はあまりの非現実感にくらりとしてしまった。

「あ、いや……火事の件、大変でしたね」

「そうなんですよ。警報が鳴ってすっごくびっくりしちゃった。慌てて外に出たんですけどパジャマ姿のままですら恥ずかしくて……お邪魔します♪」

靴を脱ぎ、彼女は玄関を上がった。

いざ同じ位置に立つと、頭一つ分は小さい彼女の背丈が浮き彫りになる。

小さな頭、整った顔、胸の膨らみはびっくりするくらいに豊かで、スカートから伸びる脚は芸術品のように白くて細い。正直、彼女が自分と同じ人間だと思えない。

（ますます可愛くなってる……おっぱいもお尻もさらに大きくなってるし。たしか85のD

カップだったかな……知っていたけど目の前に立たれると本当に綺麗だ)

ごくり、と生唾を飲んでしまう。

莉々奈は雑誌で見た時よりもさらに美しさに磨きがかかっているようだった。身体はどこを触っても柔らかかそうな彼女にどう接すればいいのかわからない。

「プロデューサー？ どうしたの？」

顔を見つめているのを不審に思ったのか莉々奈は首を傾げ、イヤリングを揺らした。

「っ！ す、すみません。なんでもないですよ」

「？ 変なプロデューサー」

武明の横を彼女がすり抜ける。瞬間、シャンプーの柔らかな香りが鼻孔をくすぐった。この香りだけでももうダメになってしまいそうだ。

そこでふと気になった。

「あの、名前呼びでも構いませんよ？ それにもっとラフな口調でもいいですし。私に気を遣っていただいているのならお構いなく。家ではリラックスして接していただければ」

親睦を深めるといふ部長の言葉を思い出す。

だが莉々奈はくるりと振り返り、腰を低くしたポーズを取る。胸を強調するその姿勢にドキリとした。

「プロデューサーって呼ばれるのは嫌？ 名前で呼んだ方がいい？」

「い、いえ、そんなことは。姫宮さんがいいならそれで」





寝汗をかいたシャツが気持ち悪くて武明は足早に浴室に向かった。うつらうつらと頭を揺らし、脱衣カゴに服を投げ入れる。

やがて真つ裸になった武明は何の遠慮もなく浴室の曇りガラスを開けた。

「——え？」

ちよūdō上がる所だったのだろう、莉々奈は片脚を湯船から出した体勢でそこにいた。まず瞳に飛び込んできたのは真つ白な二つの膨らみだ。初めて生で見ただけはまるでシルクのように輝いて見えた。先端には紅色の突起が生意気そうにツンツと張っている。

視線を落とすと髪と同じ色のアンダーヘアが目に入る。際どい衣装を着るためか、毛先は綺麗に整えられていて、ピンク色の割れ目がうつつすら見えている。陰毛を伝って滴る雫がいけない想像をかきたてた。

「あ、あの。こ、これは」

ようやく武明は彼女の顔を見た。莉々奈は時間が止まったように微動だにせず湯船に立っている。感情が麻痺したような無表情で、陰部を隠すのも忘れて武明を見つめていた。

ぴちよんぴちよんと天井から水滴が落ちる音だけが二人の間に響く。

まずい。非常にまずい。

そう思うのに彼女の裸体から目が離せない。吸い寄せられるようにその裸体の爪先から股間までを見つめ、それを絶対に消せない長期記憶の倉庫へと保管してしまう。

抗えない男の性を破つたのは、裂くような悲鳴だった。

「きゃあああああああああああああああああああああああつ！」

「うわあああつ！ ご、ごめん！ 莉々奈ちゃん！」

シャンプーやブラシを投げつけられて、武明はほうほうの体ていで脱衣所に転がり込む。

手近にあったハンドタオルを引っ掴み、そのまま自室へと逃げ込んだ。

（お、俺はなんてことを！ いくら寝ぼけていたからって！）

自分のしてしまったことに血の気が引いていく。しかし一方で、武明の股間部では熱い獣が鎌首をもたげている。

「こ、これは男の生理現象だから……」

自分で自分に言い訳しながら武明はタンスから下着を掘り出した。

——結局、外食に行くことはなかった。

頃合いを見計らって謝りに行ったものの、莉々奈は「怒ってないよ」と一言言ったきり会話を打ち切ってしまった。

そのままともに話もできずに夕食の時間となり、武明は莉々奈の用意してくれた食事を黙々と口に運んでいる。

「……………」

「……………」

気まずい沈黙の中、箸の立てる音だけが続く。



（ど、どうしたらいいんだ。くそ、俺の馬鹿。どうして莉々奈ちゃんが肌見せているだけでチンポが反応しちゃうんだよ）

もごもごと言い淀んでいると目隠しの向こうで強烈な気配が起きた。

「はるかが……ったの？」

「……え？」

「春香がよかつたの？」

「り、莉々奈ちゃん？」

「そんなに春香のおっぱいがよかつたの!？」

「うぐう！ あ、ああ！ ち、ちがつ！」

ギチギチと音を立ててペニスが腹の上で押し潰される。

ほっそりとした感触が龟头を潰した。きつと足の親指だ。それが鈴口を親の仇のようにえぐり、焼けるような痛みが走る。

「あ、ぐぐ！ い、痛いよお！」

「へえそうなんだー。そんなに痛いんだー？」

ふつと股間から重みが消える。尿道への圧迫が消えて血の巡りが正常に戻る。どくつどくつと脈打つ間にイチモツは形を取り戻して、再び宙へと鎌首をもたげ――

「ばっかみたい！」

ぶちゅっ！



再び激痛が股間を襲う。

「ふぐうううっ！」

ピンと足を伸ばし、武明は身をよじる。

しかし莉々奈は器用に体重を移動させ、足をチンポから離さない。

「ふんっ！ 変態。マゾ。キモオタク。痛いのがいいんでしょ？ こうしてぐりぐり踏まれるのがいいんでしょ！」

「ひぎっ！ あっ！ いぎい！」

「手でしてあげてたのが馬鹿みたいよねー。こうして、踏んづけてやれば、プロデューサーはビクンビクンするのにさあ！」

「ふひっ！ あっ！ あひいい！」

「そんなに、声出したら、誰か来るよ？」

「——いっ！」

反射的に歯を食いしる。目隠しの向こうで莉々奈が笑ったような気がした。

「ほらほら。声出したらバレちゃうよ？」

「い……ひっ……くう……！」

何度も踏みつけられ、さらにそれだけでは足りないとばかりに踏みにじられる。

股間がゴミクズのように扱われている。

体重を乗せた足で痛めつけられ、罵倒され、叱られる。

武明も何度も悲鳴を上げた。やめて欲しいと言った。

なのに――

(な、なんでこんな……俺、徹夜でおかしくなってるのか!?)

ぞくぞくとした感覚が身体中を巡る。股間が火が点いたように熱い。

離れていく足裏の感触が寂しい。与えられる痛みが嬉しい。

(ああ違う。そこじゃない……一番欲しい所は……そこおおお!)

イチモツの中央に体重をかけられ腰が震える。

「キモツ。プロデューサー、今どんな顔になってるかわかってる?」

「え……?」

「すっごく間拔けな顔。鼻水垂らして涙出して。目隠ししても酷い顔なのわかるよ。そのくせにやにや笑って超キモい」

「わ、笑って……?」

「ほら、出しちゃえ! 汚い汁をびゅくびゅくしちゃえ!」

「ひいひいひいひいっ!」

声を出すなという命令も忘れて武明はねじるような嬌声きょうせいを上げた。

ごすっ! ぐりっ! ぎりぎりっ! ぶちゅん!

嵐のようなストーンピングが浴びせられる。

ペニスペニスは右に左に振れ、狙いを外した踵が腹や脚にも突き刺さる。



「あ、あ、あああああつ！ いぐううううつ！」

「あはっ！ みつともない！ 踏まれながら出しちゃった！」

びゅっ！ びゅぶっ！

足に押し出されるように断続的な射精が始まった。

踏みつけられる痛みと共に射精の快感が走る。

「もっと出せ！ 踏まれながら射精しちゃえ！ 私の足でしかイケなくなっちゃえっ!!」

「ぎう！ 出るう！ いっぱい出う！ ふぎいいいいっ！」

びゅっ！ どびゅびゅびゅうっ！ びゅばばばっ！

何度も何度も肉棒が跳ねる。

ようやく射精が終わった頃には、大量の粘液でシャツが肌に張り付いていた。

「はあ……はあ……むぐ!!」

青臭いニオイが鼻先を覆う。同時にイチモツに感じていた皮膚の感触が顔に押し付けられた。

「ちよつとー、足が汚れたんですけど？」

「あ、足……？」

「舐めてくれない？」

どろりとした粘液が頬を伝う。むつとするニオイはある意味慣れ親しんだものだ。震える口を開く。ゆつくりと舌を伸ばす。

恐らくこの辺りだと当たりを付けた位置まで舌を届かせるとヨーグルトのような粘り気に触れた。

「はあ……ちゅ……ぺちや……」

「あはは、本当に舐めてるぅー♪ 自分が出したザーメン赤ちゃんみたいに舐めちゃってるじゃん♪ 本当、ぶ・ぎ・ま♪」

舌で探りながらゆつくりと口を含む。

甘いとも苦いともつかない変な味だった。粘つく感触は舌に絡みつき、鼻の奥にいつまでも臭いニオイが残留する。

「もっとしつかり舐めるのー。私の足を舐めさせてあげているんだから、心を込めて感謝しながら舌を動かさない。ほら、ありがとうは？」

「は、はい！ ありがとうございます！ ありがとうございます！」

答えながら武明は舌を動かす。

（足舐めてる…… 莉々奈ちゃんに射精して、その射精した足を舐めさせられて…… 奴隷みたいに扱われてる……）

ちゅっ、ちゅぶっ、くちゅ。

小さな指を口を含む。その指紋の形さえ覚えるつもりで舐め回した。

少ししよっぱいのは汗だろうか。

指の間に舌を潜り込ませ、少し溜まっていた垢を舐め取った。

わざわざ袖をまくり上げた莉々奈に、武明は抱きつくように身体を寄せた。

腕を掴み、もつとよく見たいと腋に顔を寄せる。

ライブを終えた腋は特に蒸れていて、近づいただけでむっとした熱い空気を感じた。

汗が溜まったそこはフェロモンの池だった。近づいただけで殴りつけるような欲情を覚え、肉棒がピクピクと痙攣する。

（莉々奈ちゃんの腋。汗でぬるぬるになってる腋、エッチだ。ヨーグルトみたいな甘い発酵臭させて俺を誘ってる。このニオイだけでイっちゃいそうだ！）

犬のように鼻を鳴らし武明は香りを丸ごと飲み込むように口を付けた。足裏とはまた違った濃厚なニオイにぶると身体が震えた。

（ああ、美味しい。これがライブを終えた莉々奈ちゃんの味なんだ。腋も脚もどうしてこんなにも魅力的なんだ。どんな高級な酒だって敵わない。汗の一滴も残したくない。全部舐めて摂取したい）

舌を伸ばし何度も腋を往復する。

流石にくすぐったいのか莉々奈はふるふると身体を震わせ口を閉じるものの、その表情は決して嫌がるものではなかった。

「ぷはっ。終わりました」

最後に鎖骨から首までを舐め、荒く息をつきながら武明は莉々奈の前に正座した。自分の奉仕は合格を貰えるだろうか。ただそれだけが気がかりだった。

「んー? まだ綺麗にしてないとこがあるじゃん」

「ど、どこを。今すぐに掃除します!」

「ふふっ、こーこ♪」

莉々奈は片手でスカートを摘まみ、ゆっくりと持ち上げていった。

艶やかな太ももが露わになる。そのさらに奥、汗が沁み込んだ真っ白なショーツが見えて来る。

「あ、ああ……まさか!」

「舐めたいでしょ? 莉々奈のお・マ・〇・コ♪」

ぐぐつとズボンの中で肉棒が張った。

気分は空腹の飼い犬だった。ご主人様の「よし」を心待ちにして、口からよだれを垂らして待ち構えてしまう。

「んふっ、わかりやすいなー。ほら、そこに転がりなさいよ」

「あうう!」

莉々奈に突き飛ばされ、武明は床に仰向けに転がった。

そんな武明の顔のちょうど真上に、莉々奈は足を跨いで仁王立ちした。

「じっくり見なさいよ。私の生マ〇コ♪」

「はあ、はあ、み、見え……!」

ゆっくりと下ろされていくショーツ。焦らすような遅さで脱がされるそれを武明は目を

皿にして見つめた。

脚に食い込む紐の動き。クロッチから離れていく秘部の形。そしてトロ〜っとシヨーツとの間に糸が伸びていたのも確認した。

「あーあ。全部見せちゃった」

「あ、ああ！ すごい濡れてる！ ふにっとして中がヒクヒクして！」

照明の逆光の中、武明はスカートの中を見上げた。

陰毛はしつとりと濡れて薄暗い中で怪しく輝いていた。秘部は初めて見た時より少し花弁を開き、ワインレッドの実もわずかに覗かせている。

「……そういえば、これは初めてだっけ？」

「え？」

莉々奈は武明の顔の上で、踊るようにくるりと身体の向きを変える。

意図がわからず呆然と口を開ける武明。

そんな姿を嘲笑うように、莉々奈は口元を怪しく歪めた。

「もちろん綺麗にしてくれるよね？ プロデューサー！」

「ふぐっ!!」

ぐちゅっ！

重力に引かれるまま莉々奈の臀部でんぶが落ちてきた。

ちようど口に秘所が当たり、鼻尖にはアナルが押し付けられる。



そして視界いっぱい広がる莉々奈の白いお尻。

「愛莉にもしたんでしょ？ なら私にはもっと丁寧にしてくれるよね？ ほらほら早くしてってば」

「うぶぶつ！ んっ！ ま、待って莉々奈ちゃ……んん！」

ぐりぐりと腰を動かし、股間を押し付けて来る莉々奈。

ふわふわとした毛先が肌を撫で、安産型の臀部が口から鼻までを完璧に埋めてしまう。

（い、息ができない！）

マシユマロのようななめらかなでふわつとした感触に顔が包まれ、呼吸を止められる。

あつという間に顔は充血し、酸欠で意識が朦朧もうろうとしてくる。

（でもこれ……莉々奈ちゃんの重さと香りが全部のしかかって……顔全部莉々奈ちゃんですっばいになってる！）

ビキビキと血流が肉棒に流れ込み、ズボンの中で起立する。

その情動に突き動かされるまま、武明は舌を振り回した。

「きゃんっ!! い、いきなりい」

「んちゅう、ちゅぶつ、ぶちゅっ！」

手探りで莉々奈の太ももを探し当て、がっちりとお掴む。

そのままベロベロと舌を動かせば、甘い味が口いっぱい広がった。

（これが莉々奈ちゃんのおま○こ……柔らかくって熱くって俺を求めてヒクヒクって動い

てる。舌で感じてるんだ……もつと、もつとしたい！」

舌先が陰唇の溝に潜り込む。濃厚な味が口に広がり、武明は腰を跳ね上げさせた。

「すごつ……本当の動物みたい♪ プロデューサーは舌まで変態ね♪」

「……ぶはっ！ はあはあ！」

莉々奈は一旦腰を浮かせ、舌先から股間を逃がす。

武明は尻の下で深呼吸して、肺に新鮮な空気を吸い込んだ。

窒息寸前から吸う空気は涙が出るくらい美味かった。それもおマ○コを目の前にするのだから何物にも代えがたい至福の時間だ。

「はい。休憩お終い♪」

「ぶふっ!!」

再び押し付けられる尻。

顔全体が肉に包まれ、呼吸が止められる。

「ちやーんと全部綺麗にするまでやめないからね。頑張つてねプロデューサー♪」

莉々奈の言葉には嗜虐的な響きがあった。

そのことに武明の鼓動が高鳴っていく。心臓が激しく打ち、その回数だけ股間が盛り上がってしまう。

もしこのまま莉々奈に殺されるのも幸せなのではないか、そんなことさえ考えた。

（でもダメだ。莉々奈ちゃんがトップアイドルになるまで……いや彼女が俺を必要としな



くなるまで死ねない。それに、もつと気持ちいいことを莉莉奈ちゃんはくれるはずだ！  
じゅるつと股間に吸いつき、舌を動かす。

心なしか先ほどより陰唇が開き始めているように感じた。

「あうっ……おしっこの穴まで……んっ」

小さな穴に舌が触れ、少し塩気のある味が広がった。

（莉莉奈ちゃんのもう一つの穴だ。エッチのたびに見てはいたけど舐めるのは初めてだ。ここから小水を出すんだ……俺は今それを舐めてるんだ……莉莉奈ちゃんが求めて！）

時折トイレから聞こえていた水音が脳裏に蘇る。そのたびに「莉莉奈ちゃんもおしっこをするんだ」と不思議な感覚に襲われたものだ。

そんな排尿穴を今、舐めている。その事実が興奮を加速させた。

「はう、んっ、くふっ……そんなに舐めてもおしっこは出ないってば」

笑いながらも莉莉奈は腰を震わせ、もつと吸えとばかりに股間を押し付けてきた。

やがて唾液とは違う粘り気を秘部が帯びてくる。

武明は本命へと舌を伸ばした。

「んくっ！　そこおっ！」

秘所の中心。膣口へと舌を滑り込ませると、きゅつと柔肉が舌先を掴まんだ。

（すごい……おマ○コがうねって俺の舌を受け入れてる……感じてるんだ……どんどん蜜も溢れて溺れちゃいそうだ！）

とろとろと溢れ出す愛液に口の周りはおもうべちやべちやだった。

蜜は口の中で唾液と混ざり合い、極上のラブジュースとなって喉を潤してくれる。

「じゅる、じゅるるるるっ！ ぢゅぼぢゅぼっ！」

「ふううううっ！ 吸いついて……るう！」

膣から蜜を吸い出す勢いで武明はそこにしゃぶりつく。

顔を無茶苦茶に振り、唇でも淫口を刺激しながら奥まで舌を入れた。

「んんっ！」

ぷしゃっ！

愛らしい喘ぎと共に、熱い飛沫が顔に吹きかけられた。

掴んでいる太ももがガクガクと痙攣し、その体重を完全に顔へと落としてくる。

（もしかして腰抜けちゃった？ 軽くイったのかな？）

押し付けられる臀部もどんどん体温が上がっていき、せつかく舐め取った肌にもう汗が浮かび始めている。発情のサインだ。

「もうっ、やらしい動き……そんなに私の蒸れおマ○コがいいんだ……」

武明の返答は夢中のクンニリングスだ。

尿道から陰<sup>えいん</sup>までをペロペロと舐め、膣口から溢れる蜜を思うさま飲み込む。

莉々奈の身体はどんどん熱を帯びていき、愛液の量もあつて尻の中はまるでスチームサウナだった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**